

久助君の話

久助君は、四年から五年になるとき、がくしゅゆうとうひたつほうせい學術優等品行方正のほうびをもらってきた。

はじめて久助君がほうびをもらったので、電気会社の集金人であるお父さんは、ひじょうにいぎごんで、それからは、久助君が学校から帰ったらすぐ、一時間勉強することに規則をきめてしまった。

久助君はこの規則を喜ばなかった。一時間たつて、家の外に出てみても、近所に友だちが遊んでいないことが多いので、そのたびに友だちをさがして歩かねばならなかったからである。

秋のからりと晴れた午後のこと、久助君は柱時計が三時半をしめすと、「ああできた。」と算術の教科書をばたツととし、机の前を立ちあがった。

そとに出るとまばゆいように明るい。だが、やれやれ、今日も仲間たちの声は聞こえない。久助君はお宮の森の方へ耳をすました。

森は久助君のところから三町はなれていたが、久助君はそこに友だちが遊んでいるかどうかを、耳で知ることができたのだ。だが、今日は、森はしんとしてうまい返事をしない。

つぎに久助君は、ほんたいの方の夜学校のあたりに向かって耳をすました。夜学校も三町ばかりへだたっている。だが、これもよい合図を送らない。

しかたがないので久助君は、彼らの集まっていそうな場所をさがしてまわることにした。もうこんなことが、なんどあつたかしれない。こんなことはほんとにいやだ。

さいしよ久助君は、宝蔵倉の前についてみた、多分の期待を持って。そこでよくみんなはキャッチボールをするから。しかしきてみると、だれもない。そのはずだ、豆が庭いっぱいほしである。これじゃ何もして遊べない。

そのつぎに久助君は、北のお寺へいった。ほんとうはあまり気がすすまなかったのだ。というのは、そこは別の通学団の遊び場所だったから。しかしこんなよい天気の日にひとりで遊ぶよりはまじだったので、いったのである。がそこにも、丈の高いはげいとうが五六本、かつと秋日はえて鐘撞堂の下に立っているばかりで、犬の子一ぴきいなかった。

まさか医者の家へなんか集まっていることもあるまいが、ともかくのぞいてみようと思って、黄色い葉のまじった豆畠のあいだを、徳一君の家の方へやっていった。その途中、ほし草のつみあげてあるそばで兵太郎君にひよつくり出会ったのである。

兵太郎君はみんなからほら、兵とあだなをつけられていたが、まったくそうだった。こんな鰻をつかんだといって両方の手の指で天秤棒ほどの太さをしてみせるので、ほんとうかと思つていてみると、筆ぐらいのめそきんが、井戸ばたの黒いかめの底にしずんでいるというふうである。

またみんなが軍艦や飛行機の話をしていると、おれが武豊でみたのは、と行って、べらぼうなことをいい出すのだった。また兵太郎君は音痴で、君が代もろくろく歌えなかったが、いっこうそんなことは気にせず、みんなが声をそろえて軍艦マーチをやっていると、すぐ唱和するので、みんなは調子が変わりなつて、やめてしまうのであった。だが、わる気はないのでみんなにきらわれたいはない。ときどき鼻をすこし右にまげるようにして、きゅつと音をたててすいあげるのと、笑うとき床の上だろが、道の上だろが、ところきらわず下にころがる癖があった。体操のとき、久助君のすぐ前なので、久助君は彼の頭のうしろ側にいくつ、どんな形の、はげがあるかをよく知っている。

兵太郎君は、てぶらで変にうかぬ顔をしていた。

「みんなどこにいったか知らんかア。」

と久助君がきいた。

「知らんげや。」

と兵太郎君が答えた。そんなことなんかどうでもいいという顔をしている。丸太棒のはしを大工さんのおみで、ちよつちよとほつてできたようなその顔を、久助君はまちかにつくづくとみた。

「徳一がれにいやひんかア。」

と、久助君がまたきいた。

「いやひんだらア。」

と、兵太郎君が答えた。赤とんぼが兵太郎君のうしろを通って行って、ほし草にとまった。そのはねが陽の光をうけてきらりと光った。

「いってみよかよオ。」

と、久助君がじれったそうにいった。

「ううん。」

と兵太郎君はなまへんじをした。

「なア、いこうかよオ。」

と、久助君はうながした。

「んでも、徳やん、さつきおつ母ンといっしよに、半田の方へいきよつたぞ。」

と、兵太郎君はいつて、強い香をはなっているほし草のところに近づき、なかばころがるようにもたれかかった。

久助君は、徳一君のところにも仲間たちはいないことがわかって、がっかりした。が兵太郎君の動作をみたら、きゆうに、ここで兵太郎君とふたりきりで遊ぼう、それでもじゆうぶんおもしろいという気がわいてきた。ほし草のつんであるところとか、藁積のならんでいるところは、子どもにはひじょうにたくさんのお楽しみをあたえてくれるものだ。そこで久助君も兵太郎君のそば

へいって、自分のからだを、ゴムまりのようにほし草に向かって投げつけた。ほし草はふわりと、やわらかに温かく久助君をうけとった。とたんに、ひちひちと音をたてて、ぱったが頭の上から豆畠まめぼたけの方へ飛んでいった。

久助君は、頭や耳に草のすじがかかったが、とろろとしなかった。ほし草の山は昼間じゆう太陽に温められていたので、そこにもたれかかっていると、お母さんのふところにだかれていたじぶんを憶い出させるようなぬくとさだった。久助君は猫ねこのようにくるいたい衝動が体からだの中にうずうずするのを感じた。

「兵タン、相撲すもうとろうかやア。」

と、久助君はいった。

「やだ。昨日相撲きのうしとって、袖そでちぎって家でしかられたもん。」

と、兵太郎君が答える。そして膝ひざを貧乏びんぼうゆるぎさせながら、あおむけに空をみている。

「んじゃ、蛙かえるとびやるかア。」

と、久助君がいう。

「あげなもおもしろかねえ。」

と、兵太郎君は一言いちごのもとにはねつけて、鼻をきゅつと鳴らす。

久助君はしばらくだまっていたが、ものたりなくてしようがない。ころころと兵太郎君の方へころがり近づいていって、草の先を、あおむいている兵太郎君の耳の中へ入れようとした。

兵太郎君はほらふきでひょうきんで、人をよく笑わせるが、こういう種類のからかいはあまりこのまない。自尊心じぞんしんが傷きずつけられるからだ。

「やめよオツ。」

と、兵太郎君がどなった。

兵太郎君がおこって久助君に向かってくれば、それは久助君ののぞむところだった。

「あんまり耳くそがたまつとるで、ちよつと掃除そうじしてやらア。」

といって、久助君はまた草の先で、兵太郎君の頭にべしやんとはりついた耳をくすぐる。

兵太郎君はおこっているつもりであったが、くすぐりたいのでとつぜんひあつというような声をあげて笑いだした。そして久助君の方にぶつかってきた。

そこでふたりは、おたがいが猫ねこの仔このようなものになってしまったことを感じた。それからふたりは、ほし草にくるまりながら、上になり下になりしてくるいはじめた。

しばらくのあいだ久助君は、冗談じょうたんのつもりでくるっていた。相手もそのつもりでやっていることだと思っていた。ところが、そのうちに、久助君は一つの疑問ぎもんにとらわれた。どうも相手は本気になってやっているらしい。久助君を下からはねのけるときに久助君の胸むねをついたが、どうも冗談じょうたん半分の争いの場合の力の入れかたとはちがっている。また久助君を上からおさえつける

ときの、相手のやせた腕がぶるぶるとふるえている。冗談半分ならそんなことはないはずである。

相手が真剣なら、此方も真剣にならなきゃいけない、と久助君はそのつもりになって、一生懸命にやりだしたが、そうするうちにまもなくまたつぎの疑問がわいてきた。やはり兵太郎君は冗談半分と心得てくるっているらしい。久助君の手が、あやまって相手の脇の下から熱っぽいふところにもぐりこんだとき、兵太郎君はクククツと笑ったからである。

相手が冗談でやっているのなら、此方だけ真剣でやっているのは男らしくないことなので、此方もそのつもりになるうと思っていると、まもなくまた前の疑問が頭をもたげる。

二つの疑問が交互にあらわれたり消えたりしたが、ふたりはともかくるいつづけた。

久助君は顔をほし草におしつけられて、ほし草をくわえたり、ほし草があるつもりでひっくり返ったところにほし草がなくて、頭をじかに地べたにぶつけ、じーんと頭中が鳴りわたって、熱い涙がうかんだりした。

また、しっかりと、複雑に、手足を相手の手足にからませているときは、自分と相手の足の区別などはつきりつかないので、相手の足をおさえつけたつもりで、自分のもう一方の足をおさえつけたりしていることもあった。

とつくみ合いは夕方までつづいた。帯はゆるみ、着物はだらしなくなってしまい、じつとり汗ばんだ。

何度目かに久助君が上になって兵太郎君をおさえつけたら、もう兵太郎君は抵抗しなかった。ふたりはしいんとなつてしまった。二町ばかりはなれた路を通るらしい車の輪の音がかからからと聞こえてきた。それがはじめて聞いたこの世の物音のように感じられた。その音はもう夕方になったということ久助君に知らせた。

久助君はふいとさびしくなった。くるいすぎたあとに、いつも感じるさびしさである。もうやめようと思った。だがもしこれで起ちあがって、兵太郎君がベソをかいていたら、どんなにやりきれぬだろうということ、久助君は痛切に感じた。おかしいことに、とつくみ合いのあいだじゆう、久助君はいつぺんも相手の顔をみなかった。いまこうして相手をおさえているながらも、自分の顔は相手の胸の横にすりつけて下を向いているので、やはり相手の顔はみていないのである。

兵太郎君は身動きもせず、じつとしている。かなり早い呼吸が久助君の顔につたってくる。兵太郎君はいったい何を考えているのだろう。

久助君はちよつと手をゆるめてみた。だが相手はもうその虚に乗じてはこない。久助君は手をはなしてしまった。それでも相手は立ちなおろうとしない。そこで久助君はついに立ちあがった。すると兵太郎君もむっくりと起きあがった。

兵太郎君は久助君のすぐ前に立つと、何もいわないで地平線のあたりをややしばらくながめて

いた。なんともいえないさびしそうなまなざしで。

久助君はびっくりした。久助君のまえに立っているのは、兵太郎君ではない、みたこともない、さびしい顔つきの少年である。

なんということか。兵太郎君だと思いこんで、こんな知らない少年と、じぶんは、半日くるっていたのである。

久助君は世界がうらがえしになったように感じた。そしてぼけんとしていた。

いったい、これはだれだろう。じぶんが半日くるっていたこの見知らぬ少年は。……

なんだ、やはり兵太郎君じゃないか。やっぱり相手は、ひごろの仲間なかまの兵太郎君だった。

そうわかって久助君はほっとした。

だが、それからの久助君はこう思うようになった。——わたしがよく知っている人間でも、ときにはまるで知らない人間になってしまふことがあるものだ。そして、わたしがよく知っているのがほんとうのその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかったものじゃない、と。そしてこれは、久助君にとって、一つの新しい悲しみであった。

底本 * 『新美南吉童話集 2 おじいさんのランプ〔新装版〕』

著者 * 新美南吉

出版社*大日本図書

出版年*二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力に使用*二〇一二年十二月一日 第一刷発行

入力 *安城市図書館情報館職員